

# 詩南車

昭和五年一月一日發行

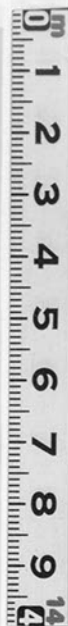
【隔月發行】

第五年  
第二拾二輯

新春躍進号

磐城

詩南社



・編一第書叢路白・

詩集

今日か明日の手紙

四六版美装・頒價五十錢（送料四錢）

いい詩とは、新しき詩とは、技巧や形式の問題ではないのだ。眞の詩とは思想的把握性の有無に依つて決定される。若しあなた方が新しき時代意識に社會我的芽生えに出發したわれ／＼の詩を求むるならば私達は此の詩集を薦めよう。誤られざる本流を彩る純情な一本の光線である。（月丘きみ夫氏評言の一節）

拾一月一日發行

月丘きみ夫氏序  
井上逸夫氏序詩  
淺海與二男著

・白路同人跋・

田中喜雄  
加藤喜子  
細井英子

發行所 白路社 東京市目黒区二〇二番地

詩 南 車

第二拾二輯

JANUARY VOL. 5 1930

海 邊 巖

高 久 晚 霞

仇浪のよし狂ふとも大八洲の海邊の巖は揺ぐともなし

浦安の岸にならべる巖群は寄せ来る波ゆ祝言を聞く

初日子も哀きみいつを讀えむと浦の岩戸をかつ照らしけり

只 野 清

荒れ狂ふ浪に打たれて揺がざる巖は皇國の姿なるらむ

逆寒きて絶えず寄せ来る大浪に神代ながらの岩はゆるがず

宮 田 青 波

船の上ゆかへり見すれば金華山の巖根は波にあらはれて立つも

八洲津の浦曲の波に打たれつゝ神代ながらに巖そそり立つ



詩南車 第二拾二輯 目次

海邊 巖 高久晚霞 只野清 宮田青波

赤い法被 八十島 稔  
秋のながれ 扇谷 義男  
店員詩篇 浅海 與三男  
放浪者 木村 杏枝味  
食乞と口癖 澤本 富之助  
静かな果物 大橋 真弓  
青春三面相 瀬古 貞治  
東洋のビエロ 藤村 昌一  
母は海で私を待つてゐる 細川 芳雄  
手を延ばして 白江 甫太郎  
蠅の與へる觸感 竹原 元治  
太平洋航海 片寄 耿二  
叔父 高久 晩霞  
龍膽の花 天野 多津雄  
新聞記者の歌 柏木 多  
病める友 井戸川 正則  
秋より冬へ 萩原 千秋  
秩父の里 柏原 多彌子

山の細道 飯村 清雪子  
紅雪 集 秋小 野谷 喜代子  
紅葉 集 秋小 野谷 喜代子  
母紅 集 秋小 野谷 喜代子  
寒竹 集 秋小 野谷 喜代子  
秋鮮 集 秋小 野谷 喜代子  
朝鮮 集 秋小 野谷 喜代子  
枯し 集 秋小 野谷 喜代子

折々の歌 詩南車 詠草 若秋 鈴佐 宮崎 水一 實  
旅あき 詩南車 詠草 若秋 鈴佐 宮崎 水一 實  
旅あき 詩南車 詠草 若秋 鈴佐 宮崎 水一 實

短歌會詠草 宮崎 水一 實  
短歌會詠草 宮崎 水一 實  
短歌會詠草 宮崎 水一 實

藪巻の竹緑なり北斗 赤松 堂  
新年 誰吟 赤松 堂  
新年 誰吟 赤松 堂  
新年 誰吟 赤松 堂

新海 邊 片寄 耿二  
新海 邊 片寄 耿二  
新海 邊 片寄 耿二  
新海 邊 片寄 耿二

「今日から明日への手紙」を讀む 片寄 耿二  
「今日から明日への手紙」を讀む 片寄 耿二  
「今日から明日への手紙」を讀む 片寄 耿二  
「今日から明日への手紙」を讀む 片寄 耿二

題字 巖谷小波 消息 同人誌紹介 編輯後記

## 海邊巖二首

只野霞橋

孤島巖巖絕海東。瞳々旭日影搖紅。  
連天激浪轟然襲。綠苔青松萬古崇。  
奇巖轟々水之涯。恰似巨人巍立姿。  
萬古海風吹不動。怒濤空碎美於花。

## プロレタリア詩への希求

高木風郎

アナキズムの詩の進展に異論はない。ボルシェビキの詩、まつたサンヂカリズムの詩の興隆に對して夢更異論はない。其他ひつくるめてプロレタリアートの詩の發展に對して其發展を願ふても夢更異論はない。いやプロ詩は日と共に益々進展して行かねばならぬ。それを滿腔の熱誠をもつて希ふのに何で客であらう筈もない。

時代はプロレタリアートの時代だ。プロレタリアートの時代にプロレタリアートの詩が進展するのは、ゾレンであつて、其他の何物でもない。まことにプロ詩の興隆は、まさに興隆せざる可らざる藝術現象であつて、凡そ時代關心に厚顔であるブル階級と言へ、誰があやしんだり、異端者視したりするものがあらう。若し詩に關與する精神あつて、それに盲目ならんとするならば、寧ろ哀れむべきである。プロ詩の興隆！まさに双手をあげて讃意を表したい。

其根本動機からプロ詩の興隆を衷心より喜び乍ら、さて現行作品に觸れて見て、心誠を感ぜざるを得ざるは何と言ふ痛恨事であらう。しかし現行プロ詩なるものは、平明な表現をもつてすれば、つまらないのである。全くつまらない。やりきれないとさへ思ふ。こんなものが何時まで詩として通用し得るか甚だもつて心細く思ふ。月々かなりの雑誌を寄贈され、そしてプロ詩をたえず目にするが未だ且て、これぞと言ふ深い感銘をうちこまれたものはない、勿論此の感銘をブル詩の感銘と毛頭同視しては居ない。

ブル詩には北原白秋にしても西條八十にしても尾崎喜八にしても、ブル詩としての深甚な感銘を豊富にもつ



て居る。常に屢々その感銘にうたれるのは、プロ詩人諸君と言へ、嘘をつかない限り、あると思ふ事實あるのだから致し方がない。

然るにプロ詩人諸君のものと來たら、一体かゝる感銘——と言ふよりも異質のかゝる程度の感銘を一度でも與へて呉れた事があるのか。かう言へば目くぢりたつてプロ詩人諸君はおこるかしらないが、おこつてもおこらなくとも事實であつて見れば致し方もあるまい。或はお題目の如く、かゝる僕に對して、プロ詩人は言ふのである。それは君がブル詩で固つて居て、ブル詩の本質が判らんからだ。しかし私はかゝる抗義ならば私の實感として嗤笑する許りであらう。寧ろ敢て言ふであらうさう言ふ君は一体詩なるものが根本的に判つて居るのかと。何でも自分のやつて居る事だけが、何でもかんでも正しかつたり、價值よばはりされべきであつたりする此思ひ上りを棄てべきであると。私が敢てそんな事まで附記した譯は、常に屢々彼等がそれを言ひかねないからである。まことに現行ブル詩位つまらないものはない。こんなものは詩でもなんでもないと思ふ所のものが、何と屢々ある事か。

しかく私がつまらぬとなす其内容は何であるか。

第一に何と觀念的である事よ。

こゝろみにブル詩三種類をとつて見給へ。そして讀んで見給へ。何と同じお題目の併列ではないか

白秋の詩三種類とれば、ひとしく白秋の色と句とリズムを持ち乍らも、三種各々又相互に異なる色と句とリズムとがそれぞれに誦者に觸れて來る。ブル詩三種にブル詩の色と句とリズムらしいものが、あるとすればあるのはあるとして、此三種が又各異なる色と句とリズムらしいものを一体何處に持て居るか。どこに幾分宛でも特色らしい相異が見出されるか。

全く殆んど同等ではないか。だから一種をよめば他の二種は又讀むに足らずと看過するものがあつても怒り

も出來まいではないか。性質上ブル詩の如く個性的でない、又目的意識的であり、だから觀念的傾向の濃厚に成るのは或は當然かも知れないが、それだからと言って、それで萬事おはれりとなすべき事かどうか。

若しブル詩が其範圍から一步も出ない、出られたとしたならば、遺憾乍らブル詩はやがて近々没落するより他はあるまい。何故ならばお經をよませられる氣で、我々は詩に對し様などは毛頭考へない。そんな義理を持ちたくはない。社會上の義理をうるさい程買はされて居るのに、藝術の中でまじ義理だてせねばならぬなら、私は藝術など臆面もなく捨てちまふであらう。

どだい觀念は斷じて詩ではない、ブル詩が觀念的であるなどと言ふ言草は、よ程割引して言へるのである、だからブル詩と銘うち乍らで詩もなんでもないので澤山にある。さう言へば、すぐにブル詩の心算で見るとからるとだなど憶面もなく言ふのであるが、ブル詩だつて詩に變りはない、何か全然別個の様に考へて居すれば迂愚嗤ふべしである、勝手にひとりがつて變改して誤つた觀念にとりつかれての言草にすぎない。事實とりつかれてる患者のブル詩人なるものの中に何と多い事よ。君等は詩論の第一頁から勉強しなほさなくてはならない。

とに角觀念的なお題目をもつてブル詩態事了れりとなして反省しないならば、ブルの没落は目に見えて居るブル詩はブル詩としての個性觀點について三省三省もつて再建させるべからざる必要大いにありである。

第二に何と無色無臭である事よ。目的意識的とか戰闘的とかの色や句やリズムを言ふのではない。詩の本質の句である。目的意識的とか戰闘的とかだけならば、何も詩でなくたつて、いくらでも出せる。むしろ最も非大衆的な詩にするなんぞは愚の骨頂である。

事實詩らしい外装だけこらしめて、一向詩でないものが澤山ある。それはつまり詩の本質から見た句や色がないからの事である。はきちがへて見る輩は、かゝる色や句と言ふと何でもかんでもブル心情の所産だとする

故意にさうするに至つては、詩自らの自殺とも知る事の出来ない病氣でさへある。

これは極めて重大な事である。もしもかう言ふ事が重大でない様なら、詩なんぞつくりなない事である。街頭宣傳でもやつて眞つ向から突き進んで、詩なんて窮言みたいな真似はすつぱりやめるがいい。

詩から離れる事が出来ないとしたら、その所をつくり考へる事だ。そこに個性や又個性的の色や句をなつかしむ心情があればこそ詩をつくるのではないか。

個性をふみにじつた所に斷じて詩はあり得ない。色や句なくして何の詩ぞ、目的意識のみで何のプロ詩ぞ。今にして唯目的意識のみをふりかざし、單なる叫喚、單なる怒號、單なる呪咀の羅列に終止するならばプロ詩の没落父日を見るよりも明瞭であらう。

個性的の色や句を盛る所にこそ眞のプロ詩の生命も活路もある事を考へて貰ひ度い。

第三にもつと眞實をうたふがいい。

プロ詩と言ふとみながみな神經衰弱的にお強い事お強いこと。皆吼えて居る。皆呪つてゐる。皆かみつしかて居る。

いくらプロだつてそれ許りではあるまい。悲觀することもあらう。笑ふこともあらう。ブル心情にとりつかれる事もあらう。

よく一日一日の心相を自分自身で點検して見るがいい。

さうしたならばプロ心相の種々相は、色々の角度をもつて表出されて居るであらう。

して見れば吼える許りがプロの全部ではあるまい。

目的意識のおきてはあまりにしばりすぎて居る。眞實をも、でつち上げる場合を屢々生む。

事は詩だ、もつと自由な精神のくしがなければ眞に生命である作品の生れる筈がない。

時に目的意識に或は背くか判らない。しかしその位の自己の眞實さがなければ、詩など生めるものではない詩だ。詩だ。何と言つたつて他とはちがふ詩だ。眞實だと思ふことをうたふがいい。

何でもかんでも目的意識にまで、もつて行かねばならない詩を、私はくだらない事だと思ふ。さうまでして詩をつくるなんてそんな愚劣な事はいつそ止めた方がいいと思ふ。

未だ言ふべき事の無いでもないが、右記三項目は特に目についたから書いた。三項と言っても、これは決して別個ばら／＼の箇條でない事は言ふまでもない。相關々係であつて一項の取得は他の取得にも成る事であるだからこれを要するに、個性を尊重せよの一項に歸納し得ると思ふ。

私は詩を愛好する精神において、他の何者の下にもおきたくない。目的意識の名において私は詩をやぐざなものにしたくはない。所が現行プロ詩なるものは如何に詩をやぐざなものとなして悟としてかへりみざるか身プロレタリアートとしてブルジョアと對角線上に相對すると同じ意味で、詩の擁護者として、これをやぐざなものとするものと私は對角線上に相對する。此の矛盾を取てさせる現行プロ詩人諸君こそうらめしき限りである。乞ふ。君らが社會のよき戦士として戦ふと同じ情熱をもつて、詩のためにつくされんことを、さうさうの間に筆をおこし、至らざる所多きを知る。大方の判讀を願ひたい。

(四、一一、一八)

## 赤い法被

八十島 稔

赤い法被が幾つも棧橋に巻かれてゐる。  
いま 彼女を乗せた連絡船が悠々と此の海峡を流れて行く。

### 春の出帆

パチンと改札口では軽い鉄の音がしてゐる。  
汽車は窓をいつばいあけながら彼女等の赤い襟巻を

だんだんゆるめてしまつた。  
爪  
彼女はいつまでも海から戻らなかつた。

小さな海峡になにを招いてゐるだらう？  
午後は赤い爪の色だ。

## 秋のなづれ

野さらしを心に風のしむ身かな 芭蕉

扇谷 義男

うつろな胸のなかで  
滌々と白い風のながれる音がきこえる  
ちつとしてゐると

その音はことさらに牙を澄んでくるやうだ  
蟲齒のやうにつめたくしみこんでくるやうだ。

1927・10・2

### 秋 断章

そらを つんざいて  
しらく ひびいてゆくもの

そのものを するどく かんずる。

1927・10・11

## 店員詩篇

V I

浅海 興三男

その手は憤怒にわなわなとふるえ高く  
俺の全身は興奮に満ち走つてゐた。

過去の俺と現在の君と  
俺は過去の記憶を忘失はしないのに  
因襲的制度が支配する

握ぎられし鐵拳は君の頭に飛ぶ  
君は無言で涙もなく  
俺への忍苦を存んでゐたのだ

薄暗き路次で泣いてゐる

そのいたけない胸に描かれるもの！故郷か  
ああ！父母を慕ふる想念か  
今は懺悔の感情に寂寥の流れを知る。

最初の鐵拳制裁は何を教へ語るものか  
俺は何故君を殴打ねばならなかつたか

## 放浪者

木村 杏枝 味

とつくの昔にはまびとから忘れられた  
幽囚な波止場で  
しやつぽのきらいな僕は  
秘霧のしめつばい惑思の中の  
ふしぎな帆船をよびかけるのだ。

月は海に溺れ  
夜はいよいよ蒼ざめて

今日も潮のしぶきに魂を生活をしつとり濡らしなが  
ら  
たとへ明日は悲しい惨苦の風景でも  
へし歪んだ瓦斯灯のもとにうづくまつて  
はがらかに放浪の歌を奇體な帆船に唄つてみようか  
だが それはあまりに佻しいことだ  
今日もいつばいの涙で實在を染める。

## 食乞と口鬚

澤本 富之助

立派な邸の高い黒塀のもとで  
老いた食乞はべつたりと踞まり  
猿のやうな手つきで  
何かもぞもぞ食べてゐる。

高い黒塀と食乞  
銀紙のやうに輝く空と食乞  
お前の姿はげつそりと寂しいな  
だが不思議と親みを感じる食乞よ。

その來歴を語らうともせず  
ただ食乞といふ忘れられた名で

## 静かな果物

大橋 眞弓

艶のいゝ密柑は籠のなかでひっそりしてゐる  
いつか足がつめたくて眼がさめたが  
やがて又寝入つたのは  
妻の好意の石油ストーブの温氣から……

日曜の朝はめざめても

## 青春三面相

瀬古 貞治

失意

自分の愛してゐる女性に裏切られる事は

あまりにも悲痛だ  
たとへ其の女性が自分を愛してくれないにしろ  
自分は愛してゐるのだ

一生黙さうとするのか  
その野性の口鬚のうそむきさよ。

ついうか／＼と時間をすごすのにことさらに  
今朝はこの静かな果物をながめながらながい間  
とりとめもなく妻の心をおもふてゐた  
ひっそり／＼としてゐて  
ときどき風にガラス障子が音を立てる  
冬らしいつめたい音を立てる……



いれられない痛手を押へ隠して其の女性の前に立つてゐる自分

裏切られた自分

それはあまりにも惨めな姿である

いつも自分の身体を

此の踏んでゐる大地から捨て、しまひたい

憎 悪

戀愛と結婚　そして生活

是等が秤の上で均等を示さないスピードの時代だ

只、白蟻のやうに片端しからむしばんで行けばいいのだ

## 東洋のピエロ

て　なく

あし　なく

もの　さらにいへず

(無精綴のおどしすらさかす)

しかし、それで自己満足の出来る人間は幸福だが自分はとてもそんな事は出来ない

寂　寥

人間は淋しい

其の生活に愛を掴み得ぬ者は不幸だ

自分には生きやうと燃え上る焰がある、希望がある

しかし、それを助けてくれるものは愛だ

愛を持ち得ぬ自分

愛を掴まえやうとしてあせつてゐる人間はいつも淋しい。

藤　村　昌　一

ひと　日

うまく　抛られ

ころげ　ころびつすつかりおどけ

達磨すがたとなつてゐた

かくて

東洋のピエロは

な　か　す

わらは　す

おどらせ　す

## 母は海で私を待つてゐる

細　川　芳　雄

砂原に腰を据えて

私は海原の悲しい夢をみる

私を見る海は人々の讃へる新鮮さもなく

何の快活も　憧もない

海水は死せし蒼白な母の寝姿なのだ

ひと　雫の涙の雨が

より大きな哀愁の川となつて流れ

嗟嘆と焦燥の波が

十年昔の涙の苔をゆすぶつて

私を待つてゐる

私の涙は冷めたい棺に入る

## 手を延ばして

白　江　甫　太　郎

月光に押し附けられたボブラの影が

この窓一ぱいに覆ひかぶさつて居る。

部屋は五燭光の暗らがり

その下で　己は

誰にも知られない墓場の人形の様に

重血した眼を双手で支えながら

資本論を透して生活の糧を讀むで居る

x

拾一時を耳にする妹の瘦せはつれた寝顔

じいつと隔いてあれば

又しても襲ひ来る陰鬱——

——尖り切つた神經はちりちりつと軀の中心に向つて双方から痙攣させる

## 蠅の與へる觸感

●曇つた街だ●●●●●

(俺の額の上の蠅はちつと動かない)

舗道の兩側に赤い菌が生える　むく　むく

——俺は青空の風景が欲しいのだ。

が、赤い菌は雨を呼んでゐる。そして

彼方から女々々々——女の一團。

瑪利亞様の一團だ。

彼女等は夫々、基督の傷を、血を唇で吸ひ狂ひ、ざわめいて来る。

x

妹よ　お前はマニキンであることを

あ奴等の前で誇つてやるがい

——血みどろな生活は美しくい——

妹よ　手を延ばして

手を延ばして暖かい心と心とを抱だき合ふのだ。

竹　原　元　治

——怪しげに彼女等の腰は水平に廻轉するよ

(俺は目をつり上げて見ると)

彼女等のスカートの奥には

白骨製の廻轉椅子が一臺づゝ装置されてあるのだ

●曇街だ●●●●●

(俺の脳髓の中に不吉なひとつの街)

——秃鷹よ、さて、これらの屍を食ひ盡せ。

——火よ、この街を、この脳髓を、

この額の上の蠅を焼き盡せ。

## 大平洋航海

ある水夫の日記——

片　寄　歌　二

午前四時五十分——

1　ほのかに水平線判明

2　午前五時半——

3　カラン、ラン、ラン、ラン、銅鑼の音

引き裂く浪

冷たき思想

エンデンは船のLOVE

船は大きいバイブで呼吸してゐる。

3　午前十時——

4　船は、今二十世紀・八十パーセントの所をカーブ

してゐる。

4　午後一時三十分——

「半速力にせよ。」——古ぼけた木造のマストで、吃

5　午後三時十分——

6　直線に構成された太陽

水夫が讀んでゐる新聞の經濟面をのぞいてゐる。

水夫の頭は靴底のエンデンを聞き命の消耗するの

を考へてゐる。

6　午後五時二十分——

7　黒潮を焚く岬の燈臺！

夕暮れの風景を吸取紙で吸取つて行く。

7　午後九時——

病みは、いけた三日月がマストにたわむれてゐる。

ああ——今日も水平線上に今日が燃え消えた。

叔 父 高 久 晚 霞

日ねもすの旅にも疲れて来し叔父は思ひし程に老ひすありけり  
只一人残りし叔父にこころめて仕へまつらくいのち長かれ  
故さとのわが家は近く住む叔父に今もかにかくちから受くるてふ  
ふる里の歳晩の業さわありと人々とむれど歸りぬ叔父は  
聲かぎり豆腐屋呼ぶを絶間なきわが鈴の音に消されて去にし(豆腐屋)  
あせりつゝ振るからに鈴のひびきを強み顧客をいよ離かる豆腐屋  
晩秋の蕭條をみな集めてか日ならべて降る雨の音わびし(雨)  
野菜屋の前に積まれし土大根に時雨降り来て洗はれて居ぬ

龍 膽 の 花 天 野 多 津 雄

畑つ豆引くべくなりてあらはなる畑土に陽はしみらなりけり  
湖の邊波しづける松が根にさむくぬれし龍膽の花  
千町田の末をはろけく澄み渡る湖のいろあざやかなれや  
霜深き朝の陽光を集めたるつぐみは途にとび去りにけり  
初めてを逢ひし友なれかくばかり親しき思ひいまだせなくに

新聞記者の歌 柏 木 哲

差し止めの知らせありしと不満げに友の新聞記者は語りぬ

「特たね」をひそに送りて夕されば持つ盃にひとり笑まるる  
送りたる記事のらぬ日は寂しかりあすともなれば他の出すべきを

(以上二首日立神峯山に遊びて)

天そる神峯に立ちて見はるかす海の奇しきに驚きぬわれ  
流れよるけむりを踏まへ誇らかに大煙突を目の下に見る

佐 々 木 顯

久々に古りにし友と逢ひにけり語らふからに日は暮れむとす  
秋の日に雨にぬれつゝほど遠き友をたづねてもてなされけり  
さ夜ふけて文かき居ればおのづから心しづもり墨の香高し

宍 戸 煤 孫

鉢植のサボテン悲し一夜さを霜にまかせて忘れ置かれし  
吾れも亦終に逝く身と知りたれど君死君死せしより確ときざみし  
破れ靴の野に棄てあるに霜おきて秋はいたくも深みけるかな

井 戸 川 正 則

嫁がざる妹の姿さびしに影置く秋の壁の冷たさ  
初冬の立ちそめたれば此の頃を子の縫物に夜を更かす母  
新舞子の濱風寒し友と来てすこせし夏の思ひ出たのし

詩南社 短歌會詠草

十一月二十日 日曜日の午後四時より詩南  
社主催第一回の短歌會が高久晚霞先生の新宅  
木兎荘で催された  
工事中にみづくが舞ひ込んで大騒ぎをした  
そうだと、木兎荘……その落成を祝する  
つもりで兼題も『木兎』『椿』を出したのだつ  
た。会場には其のみみづくの剥製がかざられ  
てゐる、いかにもキョトンとした顔がおかし  
い、からでもないがみんな氣のおけない人ば  
かりで一首一首鎗玉に上げられる、笑聲爆發  
の中に何時か十一時近くなつてしまつた。今  
更驚いて秋を別つ、來會者は木野、堀川、佐  
藤(義)、宮田、佐々木、松村、松本、諸根、今  
井、佐藤(好)の諸氏と高久先生(到着趣)出席  
者の少なかつたことが遺憾である。詠草は總  
て二首づつ。

木 兎

面のみか鼠を食ふ性も似て大祖父同じき  
木兎と猫かも 高 久 晚 霞  
木の間洩る四更の月の寂しさをなまたま  
づくの聲しきりなる

づくの聲谷七郷をさよもして赤うてるな  
りいざよいの月 只 野 閑 月  
づくの目の光りするごと小夜更くる動物  
園の鳥さの部屋

れもおかしに見れば歌をしまひ得ざるづく  
はおかしきものにこそあれ松 村 清  
木海ぬちに晝はまさしくもの思ふづくに  
幼なき親しさおほゆ

小夜くら物物の化はみな甦へる閑けさに  
居て木兎を聞く 萩 原 た け  
無花果の葉蔭にこもらふみづくの啼く  
音わびしや八朔にして

秋風に木の間の床や荒されし聲を限りに  
みづくの鳴く  
ふくるふに宿ゆづられみづくの夜毎に  
鳴きて秋深まれり

さ夜ふけてあたり静けき夜の森に叫ぶか  
と聞く木兎の聲 佐 々 木 顯  
晝をいれてやみ夜の森に時めけるみづ  
くのみ諸鳥なやむ

山の端の我が家か家も宵寒ればみづく  
のこね寂しく聞ゆ 木 野 も さ 子  
夜更けたるつめたき路を歩み来て星空に

紅雪集

病める友

萩原たけ

二年を濱の千鳥と臥す君は子にあはまくと悶えてかあらむ  
風吹かば消えもへりなんむしばめる身も母といふ名にして強し  
フリージア風のまにまにさゆらげば病む君に似て悲しかりける  
山はだのあらはとなりて寒々し溜けるもののかはきあへなく  
日曆をくる指先のわななきや何恐るらん逝く年をわれ

秋より冬へ

武田あけみ

任地へと旅立つ朝はことさらにわれに淋しき上野驛かも  
汽車いまし勿來の山を越ゆらむか斷崖に咲く白百合多し  
都より歸り來れば新しき淋しさの湧くわがこゝろかな  
潮ざいをとほくきつゝ眺め入るすがれし庭の朝のさびしき  
柿赤く色づく庭に下り立ちて嫁ぎし友をしみじみ思ふ  
物音のしづまる朝の寮舎には來鳴く小鳥もめづらしく聞こゆ

秩父の里

柏原多福子

かりそめのいたつきと見し兄かなし家を離りて入院しけり(兄病む)  
病ひえて今日病院をかへります兄のみ顔にはほろみみてり  
朝まだき秩父嶺下りて山賤が片手間に賣る栗のよろしき(秩父に住居て)  
なかなか秩父の町は住みよろしきあれ故郷の父わぶらんを

笑みたまふ父のみ顔に老ひませし影はのみえて淋しさのわく  
物云はぬ我れにしあれど父上はことごと知りてはげまし給ふ

山の細道

飯村清子

降りつづく今日この頃のうら寒しあつき風呂湯の肌にしたしき  
寺裏の山の細道行き行けば落葉かくれに咲けりりんどう  
竹むらを透さてかゞよう秋の陽はかけりよわくし再びささず  
冬の陽のかそかに透ける竹むらにあやしき虫の死にあたりけり

秋の聲

佐藤淡雪

秋の山一日めでんと語りしがはや吹き荒む木枯の聲  
暮の鐘寒々ひびく庭先の鈴蘭の芽にこもかけやるも  
カナリヤに逃げられて吾子は空籠を目に涙して見つめて居るも

紅葉

小谷喜代子

わが友はたくみな文に紅葉をへて深山の秋を知らせて來たり  
唇ふるれば冷たさおぼゆ楓葉は夕陽に映えて火にも似つれど  
師の君の酒暖めてまゐらせんと岩根飛び／＼焚木を拾ふ  
照り足らふ光の中に飯食めどしみじみ寒し土に在れば

涙

丘八重子

泣きぬれし瞳にうつる天地のあかるきいろもつれなからずや  
眞晝なり悲しき笛の流れきて心ふとしも涙ぐまれぬ  
息たへしごとくに身をばなげかけしそのひとときのわが物狂ひ

遠くみみづくを聞く  
みみづくの鳴く聲きけば新たなる悲しみのこころ我を包めり 堀川八重子  
月落ちて夜風そらに絶えぬればなる山かげにみみづくの鳴く

ふかき夜の梢に星のきらめきてまごほく  
鳴けるづくのこゑさむし佐藤義家  
雨戸もる寒夜の風の絶えさき遠所の森につく鳴く聞ゆ

山寺の森に響かひ聞く啼けり妹が怯びえ  
しそのづくのこゑ 宮田青波  
つく啼けば聲も立て得ず妹は弟と急ぎ床にもぐりし

柿

熟れ柿の夕日に映ゆるをなかなか寂しくは見つ籠の二軒家 高久 晚霞  
はるばると着きに柿は棧の板に秋の色  
深し轉び出づるも

色づきし柿の数々子はさりて打ち捨てにけり柿漉くして 佐々木顯  
小包の箱を開けはなつかしや國の父より送れる甘柿

山寺の静もる門に大木の柿色つきて夕日照りそふ 佐藤淡雪

柿の葉の落葉の下にこぼろきのたえだぬなくも哀れなりけり  
枝たわに柿色づけば毒消を賣る娘も北の故郷や戀ふ 萩原たけ

もぎ残る柿三つ二つうれにたるを喰む鳥ありさびしき夕べ  
柿赤く色づく頃の朝な朝な瀬戸に下り立つうれしき心 武田曉美

去年の日の如くにさき色づけご君は嫁きてここに居ます  
時化すきてやうやう照りは定まりぬ落柿匂ふ秋ふかみつ 松村清

つく息のしるじろ目だつ朝冷ひやなりのさほしききき眺てゆくも  
豆の葉は早霜に枯れて吹く風に飛び舞ふあたり柿なれるあり 佐藤義家

木になれる柿の赤さに残り日のかざろふころは風なきそめし  
じぶ柿の皮をむきつゝ柿漉の染みたる指をみつむるころ 堀川八重子

柿實る秋さなれば柿の木にうづくまり文殺を焼く  
秋は寒しと思ふばかりに柿の實の赤く熟れ行く頃さはなりぬ 佐藤正美



母のいふごとくに今朝は炊きたれば昨日の朝よりよく出来にけり  
近々に歸り來まする兄のこと今日もまた母は語り出でたり  
朝またき雪をまとひて着し汽車に我が母上を乗せまつるかな  
ひらけゆく心 鈴 木 す み 子  
ひたすらに頭を下げて謝りし兄の頭髮の虫止りある  
教へ子を叱りし後のさびしさに歸り行く子を呼び止めしかな

寒竹集

秋澄みて

佐藤正美

荒みたる嵐の去りて裸なる樅の大樹に朝日輝り榮ゆ  
秋空に遠くそびゆる山脈の青き處に神さびて見ゆ  
穂薄の長葉に秋の影去りて下りたる露も霜と變りぬ  
夜嵐に杜の枯葉は拂はれて地の諸草もうつろいにけり  
枯草を積みたる牛に行き逢ひぬ黄昏せまる山峽にして

秋と心

青木修

秋の空の午後の日ざしに旗立てて行く子供等の遠足の見ゆ  
泣き虫になりし弟をしかりつつころ淋しき夕暗の中  
黙々とただ働きて心足る父とは見ゆれ寂しくやあらむ  
霜白くおける朝の爽かさ空は眞青く澄みにけるかな

朝鮮朝顔の花

鈴木喜一

枯れ初し朝鮮朝顔を畑に移し水やり居れば蕾もちたり  
緑日に君とし買へる朝顔の氣づかひゐたれど花咲きそめぬ  
支那焼の鉢に移してかざらまし君と書讀む机ひろければ  
國も名も知らねど共に灯をかこみ茶話に更けゆく温泉の宿

言と我

池上登美路

「この祖父が逝たら誰がわしの墓を掃ひて呉るぢやろ」と思ひ出の言  
相寄つて手をとらん日を想ひながら君の姿を胸に秘めをる  
大空を見つめて居るが降つてくる時雨はさだかに見きはめがたい  
ともしび 秋 啄 二

行き過ぐる野中の驛のともしびの救ふが如き色なつかしも  
煙草の葉をよりもむ如き思ひして友と別れぬうつろなるかな

灰 爐

江名やすし

歸り來て湯にぬくもれば夕闇を磯浪の音軒に迫り來  
町の姉は父の容体如何にぞと灰爐を買ふて送りこしかな

枯 葉

若宮靜水

冬陽よく降りそそぎたり寒竹の筍しづかに皮ぬぎすつる  
やがて軒にとごかんばかり生ひ伸びし芽竹はよろし寒竹にして  
寒竹の皮ぬぐ音のささとひびき流るる好文亭の森  
菩提樹の枯葉さらさらまひ散れり筑波嵐の冬はも來つる

老柿の木垂れし枝に實の熟れてたわむを  
子等は飛びつかむとす  
柿一つ眞赤になりて残りある田舎寂しき  
夕ぐれの色 木野もと子  
群れ鳥さび立つたり柿の實のほの赤き  
見ゆ秋のあとに  
椽先に所在なければ遠まは手先あやう  
く柿をむきなり 木 田 忠  
柿の木に取り残されし柿ひとつ夕べの風  
にゆらぎてあるも  
柿色の因衣まこへるが八幡の森の夕陽り  
寂しく去りし 宮 田 青 波  
駄菓子屋に一錢出して青柿を食せるわら  
べを危うしと見つ

感評

木見莊短歌會詠草

松村 清

『木見』の愛題にたいいていの人々は苦しんだやうだ、その結果は古い記憶の延長や怪しい概念で作られたかのやう、おさまりの景物でさまりの畫にしてしまつたうらみがあふ新味と云ふ點も稀薄で――

◇面のみか鼠を食ふ性も似て大親父同じき木見と猫かも 高 久 晚 霞

この歌は面白いと思つて戴いた

◇木見の目の光り鋭し小夜ふくる動物園の鳥どもの部屋 只 野 閑 月

◇山の端の我が家が家も背くればみみづくの聲寂しくきこゆ 木 野 も と 子  
この二首はまあ戴ける  
◇懇ろに見れば歌をしよみ得ざる木見はおかしきものにこそあれ

と詠んだ私は高久さんの木見莊で割製の木見を親しく懇ろに眺めたが歌はうかばなかつたさに角木見二十首を通じてヒンと來る作の乏しかつたのは呉れ／＼も惜しかつた

◇木になれる柿の赤きに残り日のかざらふ頃は風なきそめし 佐 藤 義 家

◇柿一つ眞赤になりて残りある田舎さびき暮夕れの色 木 野 も と 子

◇熟れ柿の夕日に映ゆるをなかなか淋しとは見つ麓の二軒家 高 久 晚 霞

◇柿の木に取りのこされし柿一つ夕べの風にゆらぎてあるも 木 田 忠

◇山寺の静もる門に大木の柿色づきて夕日照りそふ 佐 藤 淡 雪

柿二十四首の内にこの五首がある。時刻なりその景物が木見さ猫のたぐひでない。柿と云

詩南車詠草

折々の歌

明石濱男

みはるかす浅間の裾ゆ夕まけて雑木の原に雲たちれたる  
みすずかる信濃の山なみ白々と雪をかつきて夕空に立つ  
この島や海をへだて、夕ぐれの不二の高嶺ををろがみにけり  
夕まけておほわだつみはうすすみの一色となりぬ静かなるかも  
茅ヶ崎の磯曲はろかに日の落ちて海は静かなるなりけり  
雪解して春まだ浅きさ、沼に水すみて草にひそむ魚見ゆ  
風強きゆふべとなれば山の火は空がすこで燃えひろがれり  
黒けふりたてつゝ燃えし山の火の夕べとなれば赤々と見ゆ

あきの風

旦野草笛

仰ぎ見る空に雲なし腦にまで沁み透る蒼き心いら立つ  
秋の夜半壁にとまてりて動かざる一匹の蚊と自分のかげと  
叢にこほろぎが啼く天を仰ぎにひりすとが哭く秋極まれり  
軒端打つ雨に交りてはそほとこほろぎが啼けいたむいのちか  
蒼空につかみ所なき憂さを秘めあゝおそ秋がすゝり泣き泣く  
飄々と今日も混み合ふ黄昏の都を流るゝ秋風とわれ

旅中詠

佐藤義家

よべ降りし雨のしみふかき庭土にたまたま石の光りたる見ゆ  
わづかながら海のぞみ得るこの驛を静に汽車はゆらぎ出にけり  
毛布賣の外人降りて停車場の待合室に指標見入れり  
山ひだを拓きし畑の大根の青葉の上に夕陽の降るも  
年ふりし松の間に見る海は銀の楢扇かさなるに似たり  
北海より果より来しといふ土方男は檻獄部屋のさまを語るも  
四ッ角に何の碑かもよかたぶきて直す人もなく危く建てり

旅ところどころ

宮田青波

北上の川水深し石の巻の港となれり我が船出する  
鹽釜の社をめぐる茶の木垣刈り込む鉄の音冴えきこゆ  
潟沼に獨さすらへば硫黄泉の強き湯の香に咽びたるかも（鳴子温泉）  
柱島に下げ髪の子のいとしさは陸の話の聞かんと集ふ  
唯一枚残れる京の風俗繪島の子供に出して見せたり  
小蒸汽の汽笛ひびき島の磯にわらべ三人は夕陽浴び居し  
二ッ箭の山嶺にをればけたたましき響きつたえてツエツペリンは来ぬ  
山よりと人の告げしをツエツペリンは海空遠く現れて来し  
何やらん宣傳物を撒きながら空高くと飛行機の飛ぶ  
宣傳の飛行機ならん青タープ尾長く曳きて夕焼けに消ぬ

ふ一個の題に斯くも一致してひとところに集つた。偶然の一致ではあるがこのやうな境地に安住してゐる事は實にたまたまない事だ。このやうにある一方に偏した見方はあまりに題に因はれ美化？しすぎた結果ではないだらうか

◇流柿の皮をむきつゝ柿じぶの染みたる指をみつむる心 堀川八重子

◇柿赤く色づくころの朝な朝な瀬戸に下り立つうしき心 武田曉美

此二つの心のうれしい、心はうなづける。そして、ことなく弱々しい感じを享ける。みつむる心は可成りWものであつて歌も非常にまとまり過ぎる位まとまつてゐる。會の時この二つの心が一寸問題化されさうだつたが男子入るべからずの禁札をかがやう

◇豫先きに所在なければ婆さまは手元あやふく柿をむきたり 木田忠  
あぶなかしい手法であるが微笑れる歌だ別に難くもつけられる心配もなく。

其の他淡雪さんの柿の葉の落葉。義家さんの木になれる柿、木田さんの柿の木に取りのこされしかき一つ等ばもう一段の考慮をもめたいあまりにやゝこしい見方である。

◇駄菓子屋に一錢出して青柿を食せる童を危うしと見つ 宮田青波

此の程度の歌を作るに顔をほじる苦勞はいらぬと思ふ。危ういと思つてのし句の其の不必要以上の説明は浪費である。普通の言葉で知人にこんなことがあつたと説明するそれ以下の感興もない。ここに安價な興味をもち過ぎた失敗の標本として再考をもとめる。安價な興味にあらずとするも、歌にじやうとした努力はむくひられてゐない。

粗雑な筆ながらこれで感評の筆を擱く。

希望としてはもつと自由の境地から（古い用語に因はれず）新鮮味のある把握への精選したいものである。一人一首的に感評を書く約束であつたが約束の紙数では書けさうもないので、このやうな粗雑なものにつたことを作者及宮田君にわびます。 暴言多謝

12.3 稿

《覚えていない選者が亦可なり添削を施した事と紙面の都合没書を多くした事（尤も最選した稿りです）をわびします。尚ほ原稿は半紙か同大の原稿紙に丁寧に書いて頂きたい。小紙片など書いて送られた爲め折角の力作を紛失したのもある様です。（晩霞生）

藪巻の竹緑なり北斗荘にて

赤羽松堂

謹而擬勅題 三章

よすしほの巖にさゝやぐ初日かな  
初なぎや巖の松のみどりなる  
はの／＼と波打ちきはの巖かな

新年 雜吟

いさゝかの注連かざりして屠蘇の酔  
ふくよかに元日草のゆたかなる  
現當のはかなき夢や去年今年

新年 雜吟

萩野天仙

昇る旭に勇む神馬や午の春  
いち早く年酒に頬染めにけり

屠蘇の酔赤井嵐に吹かれけり  
元日や火鉢の灰の美しき

新年 雜吟

只野閑月

炬燵にて御慶數ふる松の内  
御降りに屋根の光るや野の祠  
元旦の試筆緊縮の二字を書く  
一鉢は父の遺愛よ福壽草  
一家八口雜煮に恙なかりけり

高久木兎

波寄りて巖と語るや御代の春  
初東風や岩戸を過ぎて伊勢詣で

海邊 巖

草野不染

春めくや巖に根生えし松の色

詩南車短歌會の記

木兎莊にて

宮田青波

今度の短歌會は生憎詩南車の印刷が遅れて、かじ合てしまひ、校正や何やでても多忙を極めてゐた時だったので、それに會場の事もあつて兼題の發表案内が非常に遅れ、中には會期にやつと間にあう位になつた方もあり、事實會後に來た短歌もある、こんな譯で懸念して居たが歌の方は案外多數に集つた。兼題があまり扱れない木兎であつた事を思ひ合せると、これでも大成功と云ふべきだ。通じて見るに早く案内した方の歌の方が比較的よく出来てゐるこの點案内遅れの方には謝さればならぬ。

春寒や千鳥ごもる沖の岩  
初雪や潮散る濱の巖の上  
新海苔や巖の陰なる海士か家  
巖に立てば初日輝く春の海  
白浪や岩に碎けて冬の月

新年 吟

片寄文狂

初鶏にはのめく街々かな  
昇る旭の眞ッ正面や藏開き  
書初に知るや太郎の膽ッ玉

早梅

温泉の町の湯氣漂ふて梅早し  
花早き梅の立枝や雪の中

歳晚

髪結ふて手の隙明くや除夜の鐘  
寄せ書に墨汁一斗年忘れ

雜吟

加藤江亭

窓越に物間返す霜夜かな  
霜冷にやたら狐の啼く夜かな  
壁越にくさめのうつる霜夜かな  
我宿は一壺の酒や狸汁  
茶の花に添ふて井に行く小經かな

當季 雜詠

山部揚基

窓越の風呂にのぞむや冬の山  
山茶花や庭暖かき瀝茶かな  
冬の川細々と逝く廣野かな  
雲脚の横切つて飛ぶ冬野かな  
短日やおぼろの文字を見入りけり

さに向ふ歌者の多くは先輩方なので、これ文の歌が集つたのだが、みみづくや野の泉時代の先輩諸氏はどうしたのだらう。この外に一二の謄寫誌と四つの新聞に掲載してゐる新進の同好者が可成多數ありながら何うしてこの短歌研究最好の機會である短歌會に會せられなかつたのか一寸不思議に思はれる。

主催者が短歌會を催すのは先輩諸氏の研究會となり又新進者の進出機關ともなり併せて兩者の提携に依つて石城の歌壇を堅實にしたい考に外ならない、その爲めには高久先生、只野先生、武田先生、佐藤女史、萩原女史などいづれも親切に指導して下さいる人々であり、皮肉屋であるが、松村清君



福岡に弟を亡なふ

酒井耕影

茶昆煙むる博多灣頭秋哀し  
錦を偲ふ筑紫の小夜時雨  
月の落つ筑紫の灘や波高し

歳晚

行く年や醉生夢死におほりけり  
緊縮のどん底拂ふ年の暮

落葉集

渡邊何鳴

山月に吹き上げられし落葉かな  
霜じめり重き落葉を掃きにけり  
櫻落葉にスケッチの子のちらばれり  
風邪の夫に酒あためて餘念なし  
初雪やつくく見たる青木の實

井戸川正則

おとし銃に小飛鳥び立つ秋の空  
冬なぎや落葉掃かれし新舞子

紫野兎山

大演習を観て

對陣のまゝ夜となりけり秋の星  
繫がれし軍馬眠るや夕月夜

渡邊瘦蛙

秋時雨やむ間もなく暮れにけり  
小春日や障子に映る小鳥影

磯上錦波

初秋やそよそよゆるる桐一葉  
空高く或は低く鳴く雲雀

「今日から明日への手紙」を讀む

片寄歌二

浅海與三男君の詩集「今日から明日への手紙」を寄贈された。

特異な詩集名や、肅條とした装幀を嬉しく思つた僕は、この一巻を手にして其の一篇一篇を愛誦ある時それより受ける感銘は、浅海君の社會に對する觀察が極めて繪畫的であり、その中に點綴された人生觀がよく、スケッチされてゐることである。物に對する着眼點が鋭く、この中に生活する人生の生活に對する近代的な觀察に大きな歎びをもつ、それが決して誤まれざる、思想的把握性を持つてゐる。また月丘氏が序に云はれてゐる通り、浅海君が、肉親に對する周圍に對する、詩に對する、熱情と愛は、決して濁つてゐない。清澄さを持つてゐる。

本書を再讀、三讀して浅海君の外面的、社交的方面のみに現れた性格より、ちつとレフアンインされた

たあるものを更に本書の中に見る事が出来た。人生に對する靜感——それは餘りに冷やかなものでなく暖い握手である。その見方には少しも無理や嘘構がなく、よく生きた題材を素直に把へて何の衒氣もコンボジションもなく眞實に表してゐる。

勿論、詩はその人の個性であり、感情の噴出である。浅海君の眞の姿は詩集の前半におさめられた、「友愛」「雨」「輝ける朝」等の詩篇にある。それ等を檢討して見る時、浅海君は最も近代的思想的把握性の情熱を持つた詩人として考へられてくる。

浅海君の存在は特異である。一路藝苑に精進する情熱は一種敬虔な氣持さへ起させる。その尊敬すべき熱情によつて生れ出た詩集「今日から明日への手紙」は明かに明日の日の土臺は築かれたと思ふ。浅海君を本當に語り得るのは「今日」でなくして「明日」でなくてはならない。

「雨」と云ふ題でこんな詩がある。

雨だ、今日でもう五日も續く土砂降りだ  
重々と微動だにしない空の色よ  
風と雨は狂暴にあそこから吹きつけるのだ

なごは中々熱をもつてして  
呉れる人である。  
同じ趣味の道に連れ立つて  
歩むほど楽しくも愉快なものは  
ない。新年になつたなら  
伸びやかな心で又短歌會  
を催したい考へである。今  
度は其の徵を踏まず出席者の  
數も歌の質もつと向上さ  
せて意味ある會さしたいも  
のであるつとめて會を利用  
されん事を希んでやまない  
~~~~~  
正誤  
短歌柏木智氏の(以上二首)  
は以下二首なり、尖戸氏の  
二首目君死君死は一方不要  
紅雪集相原多彌子氏の二首  
目病ひえては病ひいて  
寒竹集佐藤正美氏三首目下  
りたるは下りたつ同若宮靜  
水氏三首目ささらとはさら  
さらとなり以上訂正す



## 「緋扇」を讀んで

旦野草笛

生活に脅た幾千、幾萬の自由労働者  
ひもじさに泣く子供達  
悲しい不安に替れる勞れた妻女等  
わう彼等の悲壯な叫び聲が世紀の響きとなつて  
俺を儲かしい陣痛へと誘ふのだ

久し振りの雨で涼を喜ぶのは誰だ？

彼等をたのしませる雨

君達を苦しめる雨

この不合理にさへ俺達は憤怒に炎へなければならぬ。

この詩は必らずしもテクニク的に勝て勝てゐるとは云ひない、また淺海君にしても代表作でないかも知れない。が僕の心境からの共鳴で僕に見ると素直な感情と、その奥を流るゝ思想的把握性の表現的な背景が、快い共鳴を持つて、三篇させられた。とにかく僕が感じた丈では、淺海君の全部を語ることは不可能だ。それ故諸君に一讀を薦める。さすれば僕のとく筆によつて語り得なかつた、著者の全部を知るに好都合だと思ふ。

口誦さんで居りますと、ほの／＼と湧き出づる郷愁にも似た遠い過去への思慕と哀愁を覺えさせられます。

どちらかと言へば、民謡篇の方が勝れて居る様に思へます。詩篇に較べて、色調も強く濃厚です。惱ましい程眞摯な情味が溢れて居り、懐かしいものばかりです。

が、一体に詩情の焦點が幾分みだれて居やしないでせうか。従つて、強く心に迫つて来る力が足りない様に思はれます。もつとぐつと喰ひ入つて来る様な強いものが欲しく思ひます。

たとへ、それが自慰的なセンチメンタリズムであつてもいい。其の儘、もつと強調に、もつと大膽に貴女獨自の其の情感を表現して下さい。例へば、あか／＼と曼珠沙華の如くに……とさへ願ひたい。とまれ、よき民謡詩人ならんことを祈ります。

「緋扇」は伊谷富貴子さんの詩民謡集で、女人文藝社バンフレット第一輯です。  
御批評と迄はまゐらないかも知れないが、感じた儘を一寸書かせて頂きます。

——すーつと眼を通し終つて、さて静かに頁を閉ぢた時、はつかりと山の端に匂ふ春の夕月にも似る仄けさに、心はしつとり濡らされて居りました。  
柔らかな感情の充溢です。物思ひ疲れてはつと吐く吐息が、夕靄の和やかさで全面に漂ふて居ります時に表現に稚さを見受けなくてもないが、これは全体を流れて居る少女らしい純真さと共に、著者の若さが偲ばれます。

乾き切つた心に、しんみりと清らかなしめやかさを與へて呉れるいゝ小曲です。

喧噪の生活にへと／＼に疲れ果てたいのちに「やさしみ」を蘇へらせて呉れます。

## 消 息

詩南社同人、佐藤義家君が今度、就職の爲め北海道に旅立つた。その送別會を先十月二十五日夜、片寄同人宅にて開催。集まる者拾一名、和氣愛々裡に十時過ぎ散會。尙記念の味意で花瓶燈臺を同君に贈つた。當夜の出席者左の如し

佐藤義家 佐々木顯 吉田政吉 丹野六郎 佐藤正實 石井賢三 片寄登代子 水町冷子 若宮登俱子 宮田青波 片寄耿二の諸氏

新住所 北海道空知郡三笠山村幾春別

彌生販賣所 猪狩方 佐藤義家

◇上久保三郎氏 郷里茨城県にて小學校に教鞭

◇田村榮氏 詩集『鳥』十二月刊

◇後期第一詩編『解散、新春より機關誌『近代藝術』を發刊

◇西村喜美子氏『東霞』解散、十二月下旬『麗人』創刊 同人、旦野

草笛 中井田鶴子 紫水秀子 淺沼君子 黒染櫻子の諸氏

◇塚田祐次氏 詩集『山雲』佐藤憲之助氏の序で大峰書店より出版

Profetarian  
Art-met

改題 題人 巡 羅 船

第2輯 近刊 BY・K・KATAJOSE

## 月並的な輯言

マルキストの言葉ぢやないが。  
現社会制度のやうに経済が基調となり世智辛い世の中に、同人雑誌の経済的危険は遅かれ、早かれ必ず出現するのである。経営組織が経済的危険区域の圏内にありて怖かされてゐる。

詩南車も、先號廿一輯に於て完全に、インコーされてしまつた。一時は休刊さへも懸念された。如何にしてこの危険區域を切抜けるかそんな月並的な言葉を考ひないでもなかつたが、どうやら、こゝやら切抜ける事が出来た。

即ち本輯が、難關突破、躍進號である。  
一九三〇年 私鐵鐵道より國有鐵道へ、第一期事業を終へた、詩南車の第二期に至らんとする力強きステップである。

一九二九年度に於けるわれ等の存在は、實に惨めだつた。表面的に華やかであつたかも知れぬが、随分苦しかつた。われ等は

それを、よく堪え、よく戦つて来た。

今 われ等のホイホイは嚇々と燃え出した。エンジンが素晴らしいスピードを車輪に加へた。運轉手はシヤベルを機手に替へて行手なすつかりと凝視してゐる。

一九三〇年度の超特急車二十二號がフルスピードで走り出したのである。

乗客は相變らず満員である。乗りきれなくて次車に廻した、詩の乗客が七八人あつた。非常に遺憾である。詩南車には一等も二等も三等もない事を、一言、云つて置く

本號から前記掲示の板通り五都市にステーションを置く事にした。未建設地であつただけに、どれだけ喰ひ入つて、どれだけ乗客を得るか見ものである。結果は驛長の報告書にもとづいて發表する。

次號は二月廿日發行。時間は正確に守る。

| 定 價 |         | 部 數     | 定 價     | 郵 税     |
|-----|---------|---------|---------|---------|
| 一 部 | 貳 拾 錢   | 貳 拾 錢   | 貳 拾 錢   | 貳 拾 錢   |
| 三 部 | 六 拾 錢   | 六 拾 錢   | 六 拾 錢   | 六 拾 錢   |
| 六 部 | 壹 圓 貳 錢 | 壹 圓 貳 錢 | 壹 圓 貳 錢 | 壹 圓 貳 錢 |

昭和四年十二月廿八日印刷  
昭和五年一月一日發行

編輯人 片 寄 耿 二  
發行所 詩 南 社  
福島縣平町五丁目廿八  
印刷所 常磐毎日印刷所

原 稿 募 集  
評論。詩。短歌。俳句。創作等必らず原稿用紙使用の事。原稿の最初に住所氏名明記の事。  
宛名 福島縣平町五丁目詩南社宛  
短歌に限り平町田町高久晚霞氏宛の事。

次輯原稿締切 一月卅一日

## 詩南社同人

宮田 青波 佐藤義家  
旦野 草笛 片寄耿二

### 受贈 雜誌

馬、労働藝術家、花、文藝、地上樂園、夜會風詩人、白路、舟江情景、流星、砂丘、賭博師、短唱圖、詩使徒、かぐのみ、北陸文藝、かぐのみ、桐の花、地上群、無軌道、北日本詩脈、後記第一詩線、岐阜民話、反逆兒、青窓、女子文學、詩短冊、白樺、曉聲、鳩笛、女人文藝、菩提樹、白蘭像、新文學、詩佳人、麗人、パレット、マカロニ、土筆、パラスク、武藏野、光露、プロノウタ、草原、初戀、交響、ほりかけ、紅薔薇、夜光蟲、書店少年、新興の青年、うるみつば、桔草

### 受贈 詩集

詩集「山桑」塚田祐次著 詩集「今日から明日への手紙」淺海與三里著 詩民謡集「耕」伊谷富貴子著 詩民謡集「紫明華」淺井紫明著

### 本誌取扱書店新設

平町各書店に有り  
佐藤書店(郡山市)鈴木書店(若松市)  
西澤書店(福島市)平野書店(水戸市)  
丸善書店(仙台市)金港堂(仙台市)

## 佐藤義家君を送る歌

宮田 青波

若き男の旅立ちなればや人よゆるせさわかしの酒し  
はし汲まむを  
しばしはと別れ惜めば赤き酒おのおのものと高らかに捧ぐ  
秋たてばなべてのものの寂しきを北海の地に君は發  
ちましぬ  
猛り男のまめふしくれの手を握りもの云ひえずに汽  
車發ちにけり

## 消 息

- 長岡恒彌氏の歌集「追憶」は搖籃社詩房より近刊
- 茨城民謡詩人協會の「民謡祭」は十二月縣内に開催
- 清永則夫氏の民謡集「下町娘」は二月東京民謡月刊社より出版
- 岡村氏氏編輯の「青窓」二週年記念として十二月號より活版に改む
- 詩南車主催の第二回短歌會は一月中旬開催の豫定
- 課題、會場は決定しただけ通知する。

謹賀新年

木村清治

山崎吉平

野崎滿藏

平町二丁目

西村屋藥舖

鈴木堅助  
電話三番

平町一丁目

株式會社  
平活版所

電話三百二番  
振替東京四七二五七番

石城銀行組合

平合同運送株式會社



醬油と味噌

山崎合名會社

渡邊醫院

內科  
小兒科

平町ネズミ坂  
電話一六一番

ウエル萬年筆  
M G K金ペン  
ライトインキ  
平町搔掘小路  
特約店 魁文堂  
電話三一三番  
振替仙台三六九番

白く雪の降る夜です  
ギヤマン室のまどに  
あたゝかな紅茶……  
アラジール……コーヒーを  
カクテル……  
なんならキユラソーに  
御心を……

パーククララ

平 驛 前

各色短冊紙  
(壽) 坂本紙店  
電話一八番  
振替東京六七番  
平町一丁目

いや……君、見違  
ひたよ  
い、洋服を求めた  
ね  
いやコレカネ……  
例の「ソレ」  
正札堂さ  
アハハ……



平町停車場

正札堂

専門醫師擔任の下に

無料検眼を開始致しました

平町一丁目

常盤屋時計店

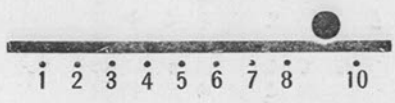
眼鏡部 電話三三九番

- 皆様の内に眼鏡を掛けず眼の悪くなる事を知らずに、また眼に合はぬ眼鏡を知らずに掛けておる方が数多く見受けられます。
- その爲めに神経衰弱や、其他種々悪影響を起す事は皆様も御承知の通り、専門醫家の屢々申して居ることです。
- 始めて眼鏡御使用の方は専門醫師の診察による適当な眼鏡を用ひる事が一番安全なことと思ひます。
- 弊店は皆様の御満足を得んが爲め數年前より東

- 都にて専門家より處方眼鏡調製方法研究し、醫師の處方通り正確に調製得る事を修得致しました。
- 最も完備せる製作機械に優良品たる獨乙製「レンズ」及び内外國製品を豊富に取揃へて安價に提供致します。
- 尙前述の趣旨に基き下記著名醫師と特約して、皆様の内眼鏡をお求めの方で診察御希望の方に弊社にて無料診察券を差上げます。御遠慮なく御出下さい。

星 眼科 醫院  
明 雲 堂 眼科 醫院  
新 妻 眼科 醫院  
吉 田 眼科 醫院  
鈴 木 眼科 醫院





K • K A M A Y A

目 科 療 診

内 科、小 兒 科、婦 人 科  
外 科、耳 鼻 咽 喉 科  
皮 膚 病、花 柳 病 科  
レ ン ト ゲ ン 科

宅 診 午 前 往 診 午 後

院 長 醫 學 士 高 久 忠  
副 院 長 新 潟 醫 學 士 赤 羽 清  
藥 局 長 藥 劑 師 佐 竹 菊 雄

平 町 田 町 六 十 四 番 地

高 久 病 院  
電 話 五 一 三 番

【 頒 價 貳 拾 錢 】